にかけては叶はぬ〳〵、殊に此の青島が陷落てたまるものか、今にあの大きな〳〵大砲の彈丸を喰らつて逃げ出すに相違ない、爲にならぬ日本人の肩を持つのは大きな損ぢや此方は永い間のお馴染なり、殊に此れから先きまたウンと儲けさして貰はればならぬ獨逸大人、なんでも彼でも獨逸に勝せればならぬと、おのが國益のなんのと、そんな愛國心などは微塵毛頭あるでなし唯もうおのが眼前の利慾に眼を眩まし、頻りと獨の犬となつて日本軍の行動を敵に報告し、若干の賞與金をもらつて居る、其の魂性の卑劣さは、實に見るから拳の一ッもお見舞申したくるる、其處で我出征軍は、此の卑劣な支那人を見て豚だ豚だと云つて居る、イヤ豚以上だから驚く、今飛行機より投下したは何物であらふか、一丁ばかり隔てた道路の中央に落下した、それと云ひさま二人の兵は、拾らひに行つた時はもう遲かつた、支那の奴に拾はれ

を隱した。

第三十二彈

（鬼大尉最後の訓示）

我が陸軍飛行機は何に物かを空中より投下して遠く雲間に其の雄姿を隱した目鋭く見付けた佐久間大尉は「誰か拾つて來い、何か投下したらしい」或る兵が笑ひながらに「大尉どの爆彈ぢやありますまいか」「左樣だ子、爆彈かも知れぬ、はゝゝゝ」

すると至極眞面目な末安曹長。

「味方に爆彈の馳走をされて堪るか、早く往つて拾らつて來い、報告筒かも知れぬ、豚に喰はれたら大變だ」

此の附近の支那人は、皆獨逸ヒイギで、支那や露國に勝た日本軍でも獨逸軍

て仕舞つた。

「確か此の邊りと見たのになー」と一人は探す。一人は不圖右手を見ると一人の支那人がスタ〳〵と逃げて行く、それと見たから逃がさない。

「豚だ、豚の奴め拾ひくさつた、畜生、巫山戯た眞似をしやがるッ」

と、直に跡追け懸けて「畜生、待てッ」と首筋掴んで仰向けに引き倒し、

「サア渡せ、今拾つた者を渡せ」

言葉が通じないから双方が珍分漢分、支那人は頻りに手を振り、なんにも知らぬと云ふ手眞似をして見せるも赦さない「兎も角も俺と一緒に事い」

有無を云はさず引ッ捕へ、佐久間大尉の前に引き据へながら事の始末を報告した、大尉は通譯をもつて調べにかゝつた、なか〳〵強情な奴で頭まから、

「知らぬ、存じませぬ、私し日本大人ヒイキあります、獨逸私し馴染ありま

せん」どうしても實を吐ない、しかし内懷中を大變に氣にして居る樣子が見へる「知らない者なら放免しやうが、拾つたらと云はなくちゃ此方はなんとも思はぬが、あれは爆彈と云つて甚だ危險な者で、少し溫まつて來るとは大變だから取調べもしたが、知らなきゃ幸で、どうも氣の毒だつたな」と自然に破烈する仕掛になつて居るから、萬一中立の支那人に怪我でもあつと運譯に言はせると件の豚奴、驚いたの驚かないの、顏蒼青になつて震い出し「日本大人に謝す、私そんな危險物と存ぜず拾ひました、どうか御助け下さい、確かに拾ひました、此れでございます」

と差出たのは飛行機より投下した報告筒であつた、大尉はいよ〳〵眞面目に「おう拾つて居たのか、一寸見せて吳れ、大分溫たまりがついて居る、もう少しく懷中で破烈する所であつた、しかし無事で結搆〳〵、其の結搆序に

縛り上げるから左樣おもへ、獨探奴ッ」

と、兵に命じて括り上げ、本隊に護送した扨て此の報告を見ると、

「本日、我大部隊は勞山灣に上陸しつつあり、全地は海軍陸戰隊の占領する所となれり」

とある、サア此の報告筒でも敵の手に渡さうものなら、大變である、しかし取り返して幸ひだつたと、一同は萬歲を唱へた、斯くて朝食を濟して何時どんな命令があらふとも直に進發するやうと、馬に鞍置き蹄鐵を調べ、此れで支度は出來たと一同は、勞山灣上陸の事など噂して居る午前九時過ぎ本隊よりの命令は。

「流亭附近、及び白砂河、沿岸一帶の敵地を偵察せよ」

との事であつた、大尉は此の命令に接して勇しく部下を集めて訓令した曰く

「流亭附近、及び白砂河沿岸の敵情偵察として此れより進軍するのである此處で一言云つて置が、流亭は當地から四里の間なれど、尤とも敵の警戒線に接近し、折々敵の斥候出沒する所である殊に白砂河沿岸は敵の第一外防禦線にして兵の配置、その他砲、または障害物等の設けもあると思ふ、されば何時敵に發見せられ、砲火の中に偵察を强行せねばならぬかも計られぬ、其處で各自に警戒するは勿論なるが、能く敵情を誤まらず觀察し、たとへ一騎となるも生還した者は此れを本隊に報告せねばならぬ殊に末安曹長は、佐久間敵彈に斃るゝも全部下を指揮すること、また一同は曹長の指揮をまつて進退すること、曹長不幸にして斃れんか故參軍曹此れに代ること、かれて申し渡した通り、威力をもつて强行偵察する以上は、如何なる場合も攻勢をとること、而して敵の兵員、其の種數、砲數

または碍物の有無を偵察して下らばすぐに退却して本隊に合して報告するである、味方の死傷に關係は敵を擊退した後である、要は偵察である」と茲で一場の訓示を與え、十分間の休養を與え、イザ時刻來たれり、大尉は馬に打ち乘り、進めの號令を下して卽墨の宿舍を跡に敵地へ敵地へと乘り出した。

第三十三彈

（大膽不敵の鬼佐久間）

我騎兵大尉佐久間善次君は末安曹長以下二十の部下を卒ゐて卽墨を跡にして進發し漸やく敵地附近に進むに從がひ、各自に警戒して流亭に着たのは午前十一時であつた、此の附近には敵影を認めず、さらば白砂河を渡つて敵の警戒線に乘り込み、敵情を偵察せん、就ては晝食をとるの必要もあり、旣々人

馬に休養を與え、其れから入り込むことにしやうと、流亭も白砂河右岸に近き堤防の陰で馬を下り、晝食を濟して再ゝび馬乘の人となり、馬を白砂河に乘り入れて左岸に到着、すぐに敵の警戒線を踏み越て一隊の陣地であつた狗塔阜の背面まで進んだ、どうも敵の動靜が分らん。

「おい末安曹長、案外だ子、此の附近はどう考へもて兵の配置してなければならぬ要地だとおもふが子、どうも其の形勢がないやうぢや、たゞ氣になるはあの豚ちや、彼奴等がチラ〳〵姿を見せるのが怪しいとおもへば思はれんこともないが、不思議と敵の樣子が分らん喃」

末安曹長も同感であつたらしい「左樣でございます、最う此の附近一帶は正しく敵の防禦線だとおもはれますがこう地圖を見ると、これが狗塔阜の村落でございませう」「左樣ぢや、狗塔阜に相違なからふ、それになんの防

禦もない處を見ると此の附近は左まで重きをおかずに居るかな、兎も角も此處で引き返すも無駄骨になるのだから、最う少し岸に沿ふて下てつ見やうなんにもお土産なしでも不憑んからな、左樣でないと、また明日も來なければならないし、聊か面倒だが下つて見やう」

と、時計を出して見て。

「まだ今が正午ぢや、早いから急ことはない、緩々と偵察が出來る」「それでは下りませう」

此處で引き返せば何事もなかつたが、切角偵察に來たものが、本隊に歸つてから「何んの異狀も認めません」

と、そんな報告はしたくない、何がなお土産を提て戻りたいとの勇しい心から、敵の眼前を横切つて、大膽不敵にも敵陣地狗塔阜の眞正面にやつて來た

先發の一騎はチラと敵の歩哨を見て銃を横にして差し上げ止れ……の信號をした。

夫れと云ふので一騎を先發に驅け近づき

「おい何うした」

「敵あり、歩哨を認めたり」

先發の報告を齎して次なる一騎は馳せ戻つて佐久間大尉に報告した

「敵あり歩哨を認めたり、終り。」

大尉はすぐに戰鬪の準備をして岸に沿ひ高地を占領せんと陣地を撰んだが、どうも思はしい陣地がない、少し退却するが、川を渡つて右岸に着かぬ、それでないと、場所がない、併し退却せんは面白からずと、すぐに全員を三手に分つて甲は現場に殘り、乙は河の中洲に、丙は右岸に退却させ、萬一敵の兵

員多き時、すぐに本隊に通知する事と申し渡して夫れ〳〵氏名を呼んで部署に就かせ、而して自分は六名の部下を左右にして敵の眞正面に向つた、此れが甲隊である、乙隊は末安曹長外七名で、敵の側面に出た、丙隊は河を渡つて流亭近くの堤防に陣を布く、その早いこと、實に瞬間である。

大尉は馬上ゆたかに乘り出し、敵の動靜や如何にとばかり、兩眼鏡を手にする此の時早く此の時遲く、敵の打ち出す一發の小銃彈は、大尉の鞦韆に當つて飛んだ、此の音に馬は白車に蹴られたかのやうに、敵の方向へ駈け出した。

敵彈はまた一發、次いでまた一發、素破と云ふ間もあらばこそ、早や雨霰と打ち出した。

乙、丙の兩隊はこれに應戰した、彼我の銃聲は豆を煎が如くであつた、大尉は戰場往來の實驗者、此の間に馬を乘り廻し、敵の配置を偵察する。あま

りの危險さに徒卒は大尉の側に進み來て「中隊長殿、お危なふございます萬一のことがあつては大變です、もう少しだけ射擊外にお退にならんと不可ません」大尉は破顔一笑、

「は〳〵〳〵俺が危險なら貴樣も危險だらふ、身を隱しとれ、貴樣等の出る所ぢやない、隱れて打つのぢや、敵は悉騎惚同で二百を下らない、なか〳〵の優勢ぢや、どうぢや誰もやられはせんか」「はい皆無事です、どうも大尉殿が左樣してお居でになると側で見て居られません、危險うて〳〵冷々いたします」

折から二挺の機關銃はカタ〳〵〳〵〳〵と音を立てたかとおもふと、それこそ彈丸の雨である一機關銃ももつて來て居るぞ」「だから危險です」

其處へ野砲の彈丸が迂鳴をうつて流亭方面に飛ぶの飛ないの、確に八門は

据へて居るらしい。

「野砲は八門、なか〳〵嚴重だ、これで障碍物の設備があれば申し分なしだ」

「だから危險です」從卒は頻りと大尉に退却を勸めたがイツかな〳〵聞き入れず尙も敵の動靜を見て居る不敵さ、とても人間とはおもはれぬ、從卒も殆んど感心して恐れ入り。

「成程、鬼大尉と云はるゝ人だな」

第三十四彈

（小賢しい敵の振舞）

獨兵は何う勘定違ひをしたものか、僅か二十騎の我が將校斥候に向つて、大人氣なくも歩騎合同の二百有余の奴が茲を先途と小銃の一齊射擊でまだ飽き足ず、機關銃に野砲を押し並べて打出したが、何にを云ふにも此方は二十名

それも、三ツに分れて居るから、折角雨と汪ぐ彈丸も、皆な無駄となつて我には一人の負傷者もない、だから味方は勇氣百倍、各自に安全の地に伏して狙ひ打ちを遣る、だから一寸でも出る奴は擊れて倒れる、佐久間大尉は馬上にあつて頻りと敵情を視察しながら味方を督勵しつゝ尙も敵の二百に對して戰鬪を繼續し、擊退せんとの考へであつがた、頻りと兩眼鏡をとつて敵の進退動作に監視を忘らなかつた、すると不思議にも野砲は沈黙し、機關銃も打方を止め、小銃の音もやゝ沈靜になつて右翼は既に退却しつゝある樣子であつた、どうも不審でならぬ、兎も角も張合の拔けた佐久間大尉は、破顏一笑「はゝゝゝ、此れで充分勝利を得た心算かな割合に張合いがなかつた、しかし此れだけの土產も出來たし今日の斥候は無駄にはならなかつた、サア此れで宜い、歸つて報告しやう」

と、まるで敵地に踏み込み十倍の敵に狙はれながら演習にでも來たやうな大尉の態度に、不斷から其の氣質を知つて居る部下の面々も驚いた。

「どうだ、鬼と云ふが違ひない子」「全くだ、あの雨と降る彈丸の中に、的になつて居るなんか俺達ぢや出來ない事さ」「自分の身よりも見て居て冷々したよ」末安曹長の組は中洲に居たから宜く見て居たもので噂ながらに岸に着いた、大尉も此れ以上止まる必要もなく、任務は完ふするは面白い、戰爭はするは、味方に一人の負傷もなしで、一ツとして欠たる事もなければ、大した滿足で河を渡つて今右岸に到着んとする背面より、突貫の聲諸共、左岸に殺到して來た敵の騎兵の一小隊、しかし此の騎兵こそ支那北京駐在獨逸公使館附二等書記官騎馬豫備中尉男爵リーデルと云ふ豫備でこそあれ、荒れ者と云はれた者で、日本にも二三度來遊し我國の事情も多少は知つて居る

言葉も少しは通じて日本武術と云ふ事に少しばかり研究もやつて見たこともあるやうに噂されて居た。

公使館書記としての手腕はどうであつたか知らぬが軍人として現役時代は思ひ切つた亂暴者で、男爵と云ふ片書と、資産あるに任せて放蕩もやるし賭博は打つし、酒は呑むワ、呑んだら亂暴するはで手も附けられず、とうとふ豫備役に編入されて仕舞つて、外交官は自已の希望で、この支那に來たものだ、支那に來ても決して評判の宜い方ではなかつた、今度青島籠城に就ては いの一番に召集されて兵役に復したが實は獨公使はリーデルに敬遠的に左遷したのでなからふかと、北京あたりでは評判されて居たさうである、果して左樣であるか無いかは知らぬが、公使館二等書記官を免ぜられ、軍務に從がふ身となつたのである。

小癪千萬なと云ふなかれ、此の戰鬪は敵も味方も所謂小手調べてある、即墨に於ての戰鬪は、ほんの斥候の衛突に過ぎなかつたが、此の戰鬪は前衛の衝突とも云ふもので獨兵にとつては何んでも彼でも最初の戰爭に勝ればならぬ所から、相手の兵の多少に關せず、歩騎合同の二百をもつて突擊し、しかも機關銃二、野砲八參加した譯である、處が流亭方向にばかり氣を取られたもので、肝腎中隊長の佐久間君や中洲に散兵して居た末安曹長の隊には氣が附ないで、誰もう何がなしに我右岸の七騎に向つて彈丸を浴せかけたもので、何んの功力もなくまた威力を示すことも出來なかつた。

其處で獨兵の方でも不審におもひ一時戰鬪を中止して、日軍の動靜を見て居たものだ處が佐久間大尉の一行が我が足許に現はれたので狼狽ながらも、例の荒れ者のリーデル中尉が

「なんだ馬鹿〳〵しい、二十足ずの騎兵ぢやないが、射擊にも及ばない、槍にかけて突き掩れ、馬蹄にかけて踏み潰してやれ、日軍の騎兵と來てはお話にならぬよ、はゝゝゝ、面白い奴と衛突したものだこなん事と知つたなら、なにも最初からあんな大袈裟な戰爭するのぢやなかつた、一小隊も居れば澤山だ、我獨逸の腕前をジヤポネーに見せてやらふッ」

と、止せば宜のに獨り強がりの腕を叩いて部下を卒ゐて逆襲的に肉迫した。

第三十五彈

（名譽の戰死鬼佐久間）

斯と見るより佐久間大尉は、早くも此處ぞ我が死場所を得たりと戰死の覺悟は色に現はれた、すぐに末安曹長を差し招き、

「末安曹長、出發に臨んで賴んでおいたは此處の事ぢや、宜しいか、俺

はもう覺悟した、一歩も退ぬぞ」末安曹長は大尉の馬前に進み。

「そりや不可ません、既に敵情も充分に偵察し、任務はお盡になつたぢやありませんかされば此のまゝ御歸隊になつても決して退却したの、イヤ敵に後ろを見せたのと、そんな非難はながらふと存じます、戰鬪ために來たと云ふよりも、偵察せよとの命令でございませう、偵察ならば既に十二分の功果を收めて居るのでありませんか、兎も角も御歸隊あるが宜しう御座いませう恁う申し上げましては、おのが生命を惜むからとも思召しませうが、大尉殿が此の流亭までも御退きにならば、それまでは私が此の敵を引き受けて一戰いたしませう、どうか左樣して頂きたいものでございます」と、おのが中隊長を失なふことを無念におもひ、頻りと戰鬪中止を勸めましたが、大尉はそれを潔よくしりぞけて一成程、君が云ふ通り、此處は此のまゝ退却しても

既に二百にあまる大敵と、三十分に亙つて戰ひ、且つ敵を一時たりとも沈默させた以上は、戰鬪に於いてもまた偵察においても、充分の功果を收めて居るに相違はないが、敵の逆襲に遭て退却したと云はれては、日獨前衛最初の戰鬪に瑕瑾が付く、叶はぬまでも戰ふて戰死してこそ武士の花ぢや、必らず止めて呉れるな、此の流亭右岸は佐久間善次が墳墓の地ぢや、俺が死んだら君は俺に代つて指揮するのぢや、宜いな分たか鬼佐久間が、如何に奮戰するか見て居てくれッ」祖先傳來、不動國行、拔けば寒さを覺ゆる古今の銘刀、鞘を拂つて敵の逆襲を右岸で邀へて勵聲一番、

「突擊ッ……」

大尉は眞先きに敵騎の中に乘り入つて、素破と云ふ間もあらばこそ、槍を捻つて突き蒐つて來る奴を「鋭ッ」と掛けたる矢聲諸共、斬り下した刀の稻

妻、眞向から梨割にして斬り落した。

斯くと見るより、末安曹長、何條大尉におくれを取らんや、仝じく日本刀を閃めかし、次く味方を鶴翼に從へて、敵騎の中に突擊した、而して敵は槍、味方は劔の、茲に日獨最初の突擊白兵戰は開かれた。

此の末安曹長は佐賀縣神崎の人で佐久間大尉の片腕として愛せらて居た丈けありて類は友の例へに洩ず、恐ろしい武骨な氣質で酒が嫌ひ煙草が嫌ひ、女子が嫌ひで誠に武張た事が好である、それに部下を可愛がることにかけては我が骨肉仝樣で、親切である而して軍務に熱心である、豪傑肌で佐久間大尉とは意氣投合、暇さへあると兩人で將棋を始める、大尉も好きなり曹長も好きである、其の癖双方とも下手だから面白い、時に依ると王將が居ないで無中になつて指して居る時がある。

「おや、俺の王はどうした、お前取りはしないか、此處にあつた筈ぢやが」「するる末安君が持駒の中から王を取り出し「此處に持つて居ります」「怪からん、此處に居りますテ、王を取る奴があるか、戻してくれ」「だつて先刻王手飛車手と角を置ました節大尉殿は飛車をお逃げになつたので、王の方をとりました、お返しするにしてからが、大尉どの、その王をどこへお置になります」「サア差當つておく可き安全な地がないからな、戻して貰へば持つて居ることにしやう」「それぢや將棋に果しが盡ません」「お前が持て居ても仝じだ」「イヤ私は味方の内に加へます、金よりも便利ですからな」正可、こんな將棋であるまいが、兎も角も佐久間對末安の將棋と來たら、聯隊中でも宜い勝負だと評判ものので、所謂る下手の横好きであつた事だけは確かだらう。

將棊は下手でも戰爭にかけては、大尉は塲數ものなり、殊に斥候、偵察と來ると剛膽だけあつて上手であつた、その片腕と云はゝる末安君の事だから、決して人におくれるやうな働きあらう筈がない、敵騎の中に突き入つて斬り捲つた。

佐久間大尉は此處を戰死の地と覺悟の上なり奮戰突擊十有余合、斬りも斬つたり七八名バタ〳〵に馬から斬り落した、されば軍服の上衣は跳ね返へる血汐を浴びて眞赤になつた。

敵も此處まで奮闘して見たが、所詮叶はぬと見たのであらう、我軍に對抗しかれ、死骸を捨てゝ退卸する、其れを我は銃をとつて射擊した、その一彈に哀れむべし、指揮官リーデル中尉は背部から胸に貫通して馬からドンと落て戰死した、それと仝時に敵は機關銃を左岸に押し出し、我に猛射を浴せか

げて來た、それッ、危險だと云ふ間もあらず、歩騎合同の敵兵は、一齊射擊と共に加へて來た。

佐久間大尉は勵聲一番「突擊ッ」と、號令を下した一刹那、敵彈來たりて右の肩より腋下へ貫通した。

「萬歳ッ……」

大尉は萬歳を呼けんで馬から落た「大尉殿、お怪我ッ……」と駈け寄つたは末安曹長であつた「おう、曹長か、後を頼む、これまで働いて死ぬには滿足ぢや、隊に歸つたら聯隊長殿へ宜しう傳へて呉れ」「なアに疵はほんの淺手……」「イヤ右肩胛部より左腋下に貫通ぢや、覺悟した戰死ぢや怨みはない、此れが別れぢや、萬歳ッ……」

再たび萬歳を叫んで破顔一笑、末安曹長に握手して砲煙彈雨の中に莞爾と

して冥目した從卒は大尉の遺骸を引ッ擔ぎ、馬諸共に退却した。

我が軍は茲に本隊の應援をまつて敵を擊退し、卽墨へ引上げた、此の戰鬪に二名の負傷者があつた。

陸軍省公表に曰く

我騎兵隊は十八日白沙河右岸流亭附近に前進し午前十一時三十分頃より約一時間に亘り對岸狗塔阜附近に據る敵と戰鬪を交へ、中隊長騎兵大尉佐久間善次戰死し兵卒二名負傷せり敵の死傷は少なくも十名を下らず。

此の戰鬪には有利なる偵察効果を敢め之れに依つて白砂河左岸一帶の敵狀を確め特に狗塔阜附近には砲數門を有する約二百の步騎兵あることを知り得たり（九月廿日）

敵方の戰報に曰く。

青島前衛戰開始さる十八日租借地の北境界鐵道線より一哩半、流亭附近にて交戰あり、駐支獨逸公使館附二等書記官陸軍豫備中尉男爵リーデル第一に戰死す（十九日北京に於て發表せらる）

嗚呼鬼大尉佐久間善次氏は、其の日も去らず騎兵少佐に任命せらる、敵を斬る七騎しかも敵の指揮官を斃す、死して怨みないのであらふ、さりながら此の武士道の典型、鬼少佐を失なつた事は、如何にも殘念千萬である、哀惜に堪ないのである。

叙勳 昇任の辭令左の如し。

任陸軍騎兵少佐叙従六位

陸軍騎兵大尉正七位勲五等功五級　佐久間善次

右は非常の大破格の恩典である、即ち陸軍武官進級令に

「大尉より少佐に進むは實役停年四年を要す」

然るに我が佐久間大尉は明治四十四年十二月十二日大尉に任ぜられたものであるから、順序よく少佐に進級するとしても明大正四年十二月ならでは停年に達しないのである、されば停年二年約十ヶ月で（今回の従軍年限加算）にして少佐に進級したのは全く破格の恩遇に接したものと云はねばならぬ。

聖上陛下には猶ほ同日附をもつて待に位一級を進め従六位に叙せられたるが、天恩の優握なること少佐も亦地下に瞑じ、永く山東の一角に芳名を〻

め、英魂は國家を守護すべきであらふ。

小佐の座右の銘に曰く。

自國の爲めに力を盡すは世界の爲に力を盡すなり、民種の特色を發揚するは人類の化育を稗補するなり護國と博愛と何ぞ撞着することあらん」と

第三十六彈（白砂河戰の價値）

佐久間少佐の戰死と白砂河戰の價値に就て某將軍の談に曰く

「十八日流亭狗塔阜間に行なはれたる戰鬪は公表の文面に依るも我が騎兵中隊が行なへる一種の威力偵察なること明らかである、隨つて我軍は既に流亭を占領し此處より白沙河を隔て〻敵の稍戰鬪力ある部隊に對峙しつ〻あることも判然せるが此の偵察に依り敵の兵員、火砲數を知り得たる點

のみにても佐久間少佐の戰死を償ふて餘ありである、尙ほ我軍は此の偵察の結果に依り何れ巧妙なる作戰計畫を決するならんが、敵に多少の防備ありとも我が後續歩兵の來着を見れば一擧して白砂河左岸は占領さるゝならん」云々

此れを見ても佐久間少佐の戰死は我が軍に取つては莫大な價値がある、少佐を失なふたは痛恨限りない事ではあるが、我攻圍軍の作戰計畫に莫大な効果があるとして見ると、國民は故少佐に對し、女々しき涙だを手向ては地下で少佐が恐るであらふ。

第三十七彈

（少佐死して餘榮あり）

草むす屍れを馬革に裹み、祖先傳來鍛ひ上げたる勤王の水府魂を雄々しき

碧血に衂りたる我が佐久間少佐の戰死に就いては其の砌り陸軍大臣岡中將より事も精細かに、

大元帥陛下に奏上したる由聞えたが　陛下には殊の外宸襟を惱ませられ二十二日（九月）午前特に內山待從武官長を陸軍省に差遣され、故少佐に關する平素の素行及び戰死當時の巨細なる事情に付き御下問遊ばされたるが、死して此の光榮に浴せる少佐は素より妻子もなき獨身の身の上とて此の有難き御下問を傳ふるに由なく陸軍省にては早速所屬職隊なる、久留米第十八師團司令部に向け其の趣むきを電送し、少佐の殊勳等に付き詳細取調べたる上御下問に奉答する筈である、少佐は地下で感泣に堪ないのであらふ。

第三十八彈

（少佐最後の手紙）

少佐佐久間君には令兄と令姉あることは前にも述ておいた、令兄は横須賀に暮して居られる、令兄の談に曰く

「善次は今回日獨の開戰するや先發を命ぜられたるより、私を久留米に招ひ寄せ後事を托して勇ましく出發いたしました、斯くて二十日年後一時留米より

「佐久間大尉九月十八日午前十一時五十分最とも名譽ある戰死をなす」

との電報を受取り初めて知りました。

前日龍口上陸の際、多大の困難を排し愈々某地に無事上陸す、獨助の夢果して如何」と認めた葉書を去る六日午後一時に受取ました。

善次は、生前軍人に、金と妻帶とは必要なしとは彼の持論でして、昨年より佛學に趣味をもち久留米の名刹梅林寺住職に就き禪學を學び、出

征の際も必らず勇名を表はす働きをすると言つて居りました、尙ほ一通の手紙は長崎在住の某支那人に託して送つたもので、書信の開封を悞れたものか態と假名をもつて記してあります」云々。

少佐の書後の手紙である、其文に。

二日無事上陸をなしたり前進中四日間兩ばかり、加之も晝夜を別れず篠つく雨にて河は增水し道は川となり、人馬とも濡れ前進の困難筆紙に盡し難し、未だ敵を見ず、幸ひ人も馬も無事安心下されたし、今後音信申し上ぐること出來得るや否や不明なり、此の手紙果して御手許に到着するや否や疑問なり。

清國某所にて　善次

御兄上樣

又水戸なる令婦小林たつ子に宛たる最後の手紙は左の通りである。

無事上陸致し候、今回の遠征は實に佐久間家武門の譽れと存じ候、横須賀御兄上様よりの御訓言、決して家名を汚すが如き行動は致し不申候も敵は袋の鼠、之に一矢を報ゆるは可憐に御座候、上陸後直ちに行動を開始し暫時くは音信遠さかるべく切に御健康を祈り奉つり候、匆々 頓首

九月〇〇日　〇〇丸船中にて認む　善次

御姉上様

少佐には庄三郎と一人の舍弟がある、日露戰爭に參加して之れまた金鷄勳章を授けられた程の勇士である、舊藩主水戸家家扶手塚氏は少佐に就て左の如く語れた。

「佐久間少佐の父は藩でも中流の祿を受け當時劍道指南役の手添をして居

られたが家計豐ならざりし爲め少佐は日清戰役に腕を失くした同藩の先輩歩兵中尉板橋直虎氏の家に食客となつて居た、當時は少佐の最も苦心した時代で、水沒や薪割の手傳をして學資を出して貰ひ勉強したが、學業はメキ〳〵と上達し品行は飽まで方正なりし爲め水戸育英會の貸費生に撰ばれ士官學校へ入學したのである、少佐の最も感ずべきは人より受けた恩義を決して忘れぬ事で、板橋直虎氏死去の後も恩人の遺族に對し月々の捧給を割きその令息の學資金を補助し居たことである。

少佐の令弟庄三郎氏もまた日露戰役に出征し特務曹長で金鷄勳章を授づけられた程の勇士である、少佐は上京の時には必ず當邸に伺候したが、侯爵は少佐戰死の號外を手にして「舊藩中より此の勇士を出したるを名譽とせらるゝと共に哀悼の情に堪ずと共の死を惜まれると申し居られます」

云々。

横綱常陸山谷右衛門は少佐とは水戸中學校時代の學友であつた、少佐戰死の發表當日は京都祇園の東京大角力千秋樂の日で梅ケ谷との取組で、今土俵に上らふとする所に新聞の號外は滿場の客に配附せられた尙ほ其の上行司は暫時く土俵を預つて號外を讀み上げた、此の號外を見た常陸山手にした柄杓を取り落し。

「佐久間さんが職死、たッ、左樣か、佐久間さんは水戸中學で私の學友でした此の間御出征前に通信を預きました」

と、流石剛氣の常陸山も悄然として土俵に上り力一杯取り組だは組だものゝ梅ケ谷に敗られたさもあるべき筈である、無理ならぬ角力であると觀客は常陸山に多大の同情をよせたと云ふ事であつた。

第三十九彈

（少佐の遺書と其內容）

出征送別の間際に臨んで令兄貞雄氏は微笑を浮べながらも勵まして。

「善次、貴樣萬一後ろ傷でも負て歸らふものなら此の兄が承知しないぞ」と言はれた時に少佐は破顏一笑「什麼ことになつたら兄さんのお手を拜借するまでも御座いません、自分で立派に切腹してお目にかけます」

と、莞爾と笑つて勇しく久留米驛を發車した少佐には既に〳〵出征前から戰死お覺悟がありて、哀れ袋の鼠とは云へ、東洋一の大要塞、青島こそ我が最後の塲所なるぞと、かれて止宿して居た福岡縣三井郡節原村渡邊しな子方に托せる白木の秘密箱、此れぞ少佐が死後を托する遺書である、しな子は少佐の戰死を聞いて、涙たながらに預りし白木の箱を取り出だし、少

佐の令兄横須賀海軍機關學校在勤佐久間貞男氏へ宛郵送した。

貞男氏は婦たつ子、たつ子の夫小林資俊氏立會の下に少佐の遺せし白木の箱を開いた、果してそれは少佐の遺書であつた。

函中には少佐が東京騎兵學校戰術科に入校中本郷千駄ヶ谷の瑞圓寺住職猪崎氏に就き禪を終めた時に撮影した和服姿に珠數を掛けて合掌せる寫眞と號を兵策と記せる臍の緒、明治四十二年一月元旦より大正二年末日までの日誌二册と「暮を送る」所感と題する所感文及び粗末な卷紙約二丈の遺書であつた。

遺書の大要は左の通りである。

「予が若し死せば目下朝鮮清津に在住の實弟小林庄三郎より令兄小林資俊氏立會合議の上財産の整理をなす事。

尙ほ兄上は未だ相續者なきを憂ふ。若し予が死して陛下より御下賜金あらば水戸の慈善事業孤兒院及び小學校に寄附すべし。

尙ほ臍の緒は遺骨と共に埋葬しくれよ又佐久間家家例により神式を以て葬儀執行すべし。

第四十彈

（遺骨となつて凱旋す）

佐久間少佐の遺骨は十月三日午前九時久留米守師團司令部に着した、司令部は少佐所屬隊に歸隊せしめた。

隊本部では一同感慨無量、臼井隊長は鄭重に白木の函に納め黑布を蔽ひ本隊の一室壇上に安置し。

「故陸軍騎兵少佐　佐久間善次之靈」

と書し特旨叙位及び叙位辭令の二通を三寶に納め大花瓶に眞榊を手向、神酒山海の献饌神々しく、横須賀水戸より遺族の着せるを待つて各隊長其の他參列神式祭典を執行せられた。

斯くて少佐に遺族の手に擁せられ令兄貞男氏の宅に凱旋した。

嗚呼偉なる哉、我が陸軍騎兵少佐鬼佐久間善次君、君は出征前覺悟の通り遺骨となつて同僚に先立ち凱旋したのだある。

第四十一彈

（叙勳行賞の御沙汰）

少佐戰死當日附をもつて左の通り叙勳行賞の御沙汰があつた。

叙功四級授金鵄勳章（年金五百圓）
叙勳四等授旭日小授章（九月十八日附）

陸軍騎兵少佐從六位勳五等功六級 佐久間善次

聖恩枯骨に及ぶ、名は永く山東の一角に殘り青島攻圍軍史に光輝を放つ可く少佐の英靈以つて瞑ずべしである。

第四十二彈

（戰史上の第一記錄）

佐久間少佐の戰死に次で、是非とも語らねばならぬ我が攻圍軍の前進と、白砂河を押し渡つて敵を追ひ第一防禦線に肉迫し而かして名譽の戰死を遂げたる池部中尉の功績である、先づ我陸軍省の公表に曰く。

「我軍は九月二十六日女姑山、石門山（流亭東南方約一里半）九水廟（柳樹臺西南方約一里）邊に向ひ前進し、午後三時以來敵の第一前進陣地線たる樓山後南方高地より黒見及び王家（龍口西方約一里）を經、龍口附近に互る敵を砲擊し午後六時三十分先づ黒見南方鞍部附近に據れる敵を擊退し、次いで龍口方面の敵を擊退せり。

樓山後南方高地の敵は二十六日夜までは未だ退却するに至らず引き續き攻擊中なり。

彼我の損失未だ詳らかならざるも既に確知せる我が死傷は陸軍歩兵中尉池部末尾外卒二負傷陸軍歩兵中尉津田業外下士以下十一なり。

此の戰鬪間敵の砲艦は絶ず海上より我が右側を砲擊し夜間は探照燈をもつて照射しつゝあり。

また仝時に陸軍飛行機隊の活動を公表した、其の報は左の通りであつた。

二十五日以來我が飛行機の行動概れ左の如し。

二十五日朝二機をもつて李村河左岸の高地線を偵察す、此の際海泊河左岸より五十餘發の砲擊を受けたるも損害なし、二十六日早朝一機をもつて李村河左岸の偵察に任じ他の一機をもつて敵飛行機に對し是れが掩護に任ず該偵察間もまた歩砲兵の射擊を受けたるも何ん等損害なし。

二十六日午後我が攻擊戰鬪間一機を以つて絶えず敵陣地上を飛行せしめ時々該飛行機より投下する報告板により敵の動靜を察知するを得たり。

さあるが、此の一戰に依つて久佐間少佐と流亭附近に戰ふた例の前衛は、正に防禦線を捨てゝ了つて遠く青島さして逃げ失せたのである少佐地下で萬歳を三唱して鬼共を驚かして居るのであらふ、しかし此の一戰に於いて池部

中尉を失なつたは、かへすがへすも遺憾である、先づ中尉の經歷を語るまでに此の戰鬪の狀況及び價値を述ればならぬ。

龍口及び勞山灣より上陸した我が軍は二十六日破竹の勢ひをもつて敵を擊退しつゝ前進し遂に敵の頑固に固守せんとした第一防禦線を突破した、斯くして全線攻擊は開始せられたのであつた。

此の攻擊に依り黑見、龍口方面に依れる敵の中堅右翼は騰くも擊退されたが、さて天險と艦艇の掩護とを賴み、樓山背後に陣地を固守した左翼の敵のみは容易に退却を行はず、健氣にも我れに抵抗を繼續して居た、併し友軍の散々なる潰亂と我が猛烈な攻擊との內憂外患に搗て加へて秋後の寂莫に孤軍の士卒は臆病風を喰つて二十七日拂曉前、我が軍が敢行せる襲擊に一と溜りもなく擊退した、我は敵の潰亂敗走の虛に乘じて。

「敵は退却、追擊ッ……」

追擊の號令は全線に傳はるや、進擊の喇叭は勇ましく吹き立てられた、しかし勝に乘じた我が軍は、勇氣百倍面白半分。

「追擊〳〵」「おい、コラ、俺を放つて貴樣ばかり追擊た何だ、おい待て、待ぬか」「なんだ貴樣は足に負傷してるぢやないか担架の來るまで其處で寢て居らふ、土產には獨助の首をもつて來るから」「イヤだ〳〵これ位ひの傷で衛生隊部に擔がれて堪るもんか、僕は此の追擊にはいやでも加はるぞ負うて吳れ、イヤならおのれ擲つぞ、彈はまだ二十から殘つて居るから眞橫に擊つぞ」「コラ笑談ぢやないぞ、貴樣に擊れてたまるもんか、止せ、止せと云ふのに」「ぢや連れて行つて吳れるか」「連れて行くにしてからが、そんな足の利ないのに追擊だから我慢せい」「イヤなら擊つぞ、どうしても僕は自

分の恨みぢやない、池部中尉殿の敵だけは討たればすまぬ、それも餘計のこさぢやれへ、たつた十人ばかりで宜い、だから賴むよ」

「成程、左樣云へば池部中尉殿には大分世話になつてるぞ、ぢや連れて行かふ、サア來い、えッ、面倒だ、負て行かふ、追擊〳〵」「萬歲、萬歲、面白い〳〵」「コラ、背で萬歲でもあるまい、左樣動いたら重くて仕樣がない、靜かにしろ」

我が軍には斯樣餘裕もあるが、敗軍の獨軍には戰友どころか、逃げるにも四苦八苦。

「おい、コラ僕を棄て一人で逃げんとは殺生だ後生だから負て逃げてくれ」

「イヤだ〳〵他人の世話どころか我が身一ッが持てあつかつて居るのだ、宜い時に怪我したな、日本軍に捕まつて米の飯食つて遊んで居るが宜い、俺も

都合に依つては降參する考へだから、日本軍に逢たら宜敷く言つておいて吳れ、退却〳〵」

こんな調子で死骸も負傷者も放たらかしてドン〳〵逃げて仕舞ふ、なんと情けない話でないか。

第四十三彈

（女姑山の同士擊）

我軍は敵の潰走につけ入つて猛烈なる追擊的强行軍を行ひ二十七日午前まで右翼は李村南山の東方を流るゝ張村河の左右沿岸を南下し最左翼は蕭家灣に進み無名河を張村河との形造る三角地區の中央金家嶺を占領した。

中央部隊は李村南山の西北に當る李村河兩岸に沿ひ張、李兩河の合流點に近い家韓哥庄・王家韓哥庄の線を占領し、更に逃ぐる敵を追擊した。

樓山方面の右翼軍は考虎山を左りに仰きつゝ鐵道に沿ひ滄口を經て李村河口の地點に到達した。

我が中央左翼の兩軍が比較的安全な追擊戰を續行したに反して膠州灣の沿岸に沿ひ進出せる右翼軍は灣内に游戈せる砲艦と覺へた艦艇から猛烈な砲火を送られ、茲に難戰に遭遇したが、我が軍の飛行機二基は時來れりと灣内の碧海に勇姿を現はし、盛に爆彈投下を行なつた結果敵は狼狽して我も前進部隊の砲擊ごころの騷きにあらず、頭の上が怪しくなつて來たと云ふので、今度は飛行機目蒐けて機關銃砲を亂射したが、我が搭乘者の妙技と敵砲手の狼狽と相待つて、飛行機は何等の損害をも蒙むらなかつたのである、此の戰鬪中、右翼軍に參加した池部中尉は敵の第一防禦陣地線、によさん、女姑山、石門山を砲擊する際、敵の砲彈破片に致命の重傷を負ひ此の際ある包圍線の追擊と

その止まる所を見ずに瞑目したした。

殘念と云へば此れ位ひ殘念な話もないが中尉は此の戰鬪に參加することを我が最後の戰鬪で思ふ存分奮鬪し、敵の打ち出す大口徑の火砲彈丸に抱き付いて戰死したいと云つて部下を笑はせ、戰鬪に參加した位なので、砲彈に斃れたら地下で破顏一笑、これで地獄の門も意張て通られると云つて居るだらふ何樣要塞戰に際して海陸の共同作戰は旅順攻圍戰に於ても例があり、あまり珍らしい話でもないが陸軍對軍艦、飛行機對軍艦、軍艦對飛行機と云ふ水陸空の複雜極まる戰鬪はいまだ從來の戰史に見ざる所である、規模の大小は扨て措き我が青島攻圍が軍此の海陸空の新戰鬪の開祖たる名譽を得た譯である、此の光輝ある戰鬪に參加して奮鬪して、戰死した池部中尉もまた名譽と云はればならぬ。

池部君の名譽に引き代へて茲に不名譽も不名譽、世界の物笑ひとなつて居る獨軍の大失敗が池部君戰死の前後に行はれてそれは讀者も御承知であらふ彼の白砂河に最さも近き敵の防禦陣地線女姑山の同士擊である、お笑ひ話しに一ッ述べておかふと思ふ。

御案内の通り天險と堅牢を誇る青島要塞の前面の海上は我が艦隊の封鎖堅く背面は我が陸軍が既に白沙河の左岸敵の第一線に迫つて居るので要塞内の獨兵は恰かも袋ろの中の鼠たるに過ない、灣頭を洗ふ波の音も我が軍の襲來かと恐れ、月下に孤雁の渡るを見ては我が飛行機の飛揚かと膽を冷し、樹木の風に弄られるにも我軍の夜襲かと神經過敏になつて居る所へ二十三日一名の獨兵、しかも上等兵一名は白砂河の警戒線に於いて捕虜となつたので、夫れからと云ふものは一層恐怖の念を起したに違ひない其處へもつて來て白砂

河々口にある女姑山の急設砲臺が、我が軍の占領する所となつたとの風說が青島まで傳はつたから堪らない、青島總督ヲルデック將軍、驚きながらも赫ッとなり、すぐに砲艦に出動を促がし。

「女姑山、既に敵に奪はる、宜しく砲の威力をもつて擊退すべし」

と命じた、命を受けた砲艦では、此奴あまり有難くない命令で一朝一夕では出動しさうな樣子でない「何を愚圖〳〵して居るか」と云へば海軍の方では濟したもので「日本は要塞攻擊には經驗がある、だから高地を占領したならば、其處には必ず大口徑の重砲を据へたに相違ない、迂濶に手を出さうものなら、逆樣にやられる恐れがある、よく〳〵此處は愼重の態度を採ればたいへん大變でございます」

臆病は臆病でも理屈付きの臆病風を吹かして天晴れ軍師らしい事を云つて居

る、すると乃將軍の命令が振るつて居る。

「萬一日本軍にして重砲ならば、すぐに退却せま、惡戰して多大の損害を出だすことは得策にあらず、兎も角も出動せよ」

成程獨逸式の命令である、相手が強くば退却せよ、これならば如何な臆氣な奴でも出動しない事はない。

「ぢや行つてまゐります」

と信號する、乃將軍は「成功を祈る」

と返す、其處で一砲艦はイヤ〳〵ながら隱島の島陰からヤツコラサと出動し恐怖〳〵ながら白砂河口まで進んで見た、すると、どうも砲臺内が寂と納まつて居る樣子が可怪いので、すぐに砲門を開ひて戰鬪準備にかゝつた。

元來女姑山と云ふ所は白砂河が膠州灣に流れ落ちる河口の左岸に位する一

寒村であるが其の對岸は我が軍の占領する所で陣地一帶が赤土の平原なのに引き代へ、左岸の一帶は多く山脈續きで河口より膠州灣に面して沿岸僅かに砂と赤土の平地がある許りである、女姑は其の山麓にある戸數僅かに五六十戸の一小寒村で、僅なにジヤンクや小さな商船が出入する位の所ろであるが、日獨開戰となるや、獨逸は此處に急設ながらも一砲臺を築き上げ青島要塞の防禦第一線の左翼として固めて居たのであつた。

サテも敵の砲艦は、既に日本軍のために此の砲臺も占領されたものとおもひ込み看彈距離を測つて此れならば大丈夫、サア打て打ての號令で、盛んに砲擊を加へたものだ、それが恐怖とおもふ念があつて打つのだから猛烈だ、處が此方は砲臺の守備兵でも驚いたの驚かないの、灣内までも既に日本軍艦が浸入したものかと其處は獨逸式の早合點し

「應戰したものだらふか、それとも退却か」と一人が云へば一退却は退巷だか此の分ならば、滅多に此處に落下さうにないからな、一ッ應戰しやうぢやないかなんだか知らんが日本の軍艦も自慢程にもなく、照準が定まらんあまり射擊は上手でない子」「全くだ、もう四五十發も打つて居るが皆な上を越して了ふ、此れならばまア安心して相手にならふ」「夫れ宜からふ、應戰〳〵」

味方計ちさは夢にも知らず、砲臺からは八門の砲をおし並べて盲ら打ちに砲からは何に糞ッ、そんな重砲なんか恐怖くないぞ此れ喰へッとドン〳〵〳〵と打ち出しだ諺ざにも云ふ通り、下手な鐵砲も數打ちや中るで、如何に未熟な獨の海軍でも百發と擊つ間には、どうかすると怪我の相子に砲臺の中にホカリと打ち込むからたまらない、サア來た、もう叶はぬ、退却〳〵と勝手次

第に號令をかけては我れ先きと退却する、その姿が日本の軍隊に非ずして、我が味方の陸兵だから砲艦でも驚いた、おや〳〵あれは味方か、ぢや打つぢやなかつたと砲擊は中止する、すると陸兵の方でも軍艦旗が味方のだから、おや〳〵〳〵味方の砲艦か、なんだ馬鹿〳〵しいと相方胸なでおろして砲艦だけは、報告のため引き揚げた、其處へ日本軍の右翼が鬨を作つて殺到したから支え切れさうな筈もなく、苦もなく退却した其の陣地を、我軍は占領したのであつた、此處で名譽の戰死者池亂大尉を語らねばならぬ。

第四十四彈

（眞に此特進士官）

青島第一防禦隊攻擊戰に於いて名譽の戰死を遂げたる歩兵大尉池部末尾君は今年四十四才であつた、熊本市西坪井町に生れた純粹の肥後武士

である、舊細川家の家臣での家柄である、日清、日露の二大戰役に參加して殊勳あり、身は一兵卒より特進せる將校であつた、其の經歷を畧記せんに左の通りである。

明治二十四年十二月徴兵として歩兵第十三聯隊に入隊、日清、日露の兩戰役に從事し、累進して明治三十七年十二月特務曹長、全三十九年八月歩兵少尉に任ぜられ第四十八聯隊附に補せらる、同三十八年十月正八位に叙せらる、全四十年八月兼臨時建築部久留米支部員、同四十一年十二月歩兵中尉、全四十二年三月從七位、同四十四年三月免兼職、大正三年四月、正七位、今回青島攻圍軍に參加して山東に出征、九月二十六日女姑山に於て戰死。

中尉は特旨を以て同日大尉に上進、此れまで行賞の御沙汰に接したるは明治

三十九年四月三十七八年戰役の功により勳六等に叙し旭日章を授く、大正三年五月勳五等に叙し瑞寶章を授けらる。

前述、我が青島攻圍軍第二の犠牲となれる池部大尉の人となりは如何に池部君は經歷の通り、實に明治二十四年十二月一日第六師團歩兵第十三聯隊に入隊したが一生を國家の干城で終る第一歩であつた、其の當時の聯隊長は梅澤大佐であつたとおもふ、何にが扨て十三聯隊と云へば熊本男子の集合聯隊で元氣をもつて鳴したものだ、肥後武士と云ふスタルダ教育を受けて居る武士出なり殊に元氣で鳴らす聯隊で軍隊教育を受けた池部君は何事にも劔を叩いて。

「左樣か、宜し、乃公は夫れで承知するが帶劔か承知しないからな」

の調子で癇癪刀以來、腰が淋しくなつて不可と嘆する嚴父に此の劔が、劔が

と羨ましがらせ、一兵卒でも輕輩ぢやない、此れでもお目見得以上イヤ大名以上だと意張たものだ、それがまた嚴父の自慢の一つとなつて居た、いつも親類顔を揃へると。

「池部の家名も俺一代で武士が癈るかとおもふて居たに末尾が武士で暮すことになつて、滿足ぢや」

と云つては獨り天狗であつた、天狗の兒は一兵卒からおい〳〵と出世して、上等兵から二等軍曹、曹長から特務曹長と鰻上りに昇つて、とうと陸軍少尉に特進した、而して歩兵四十八聯隊附に補せられ臨時建築部久留米支部員と云ふ責任重き役をまで兼ることになつた、而して久留米に轉任した、尤も此の間には日清、日露、兩大戰役に從軍し一簾の武功を現はして居る。

大尉の直屬將官であつたことのある竹上歩兵大佐の談に、自分が池部大尉に會ふたのは明治四十一年久留米建築支部が新設され自分が其の首座として久留米の聯隊長に對して、築建事務の如き煩雜な仕事に適した一士官を分遣して貰ひたいと求めた所が、其の選に當り支部員となつて來たのが池部其の人であつた。

池部は軀幹矮小であつたが頭から爪先まで軍人氣質で充ち滿た男で教導團をも出でざる眞の特進將校であつたに拘はらず、如何なる面倒な計算報告でも、命じたら唯々として所定の期日までには立派に仕上くるの常であつたので支部員中の模範部員であつた。

流石に軍隊を家庭と思ふて生涯を送つた人物だけに、平常勅諭の箇條を實踐實行して居た、されば火急の場合を慮ばかつて久留米聯隊の陸を選んで

住んで居た。

住宅に於ける生活の如きは、飽までも質素を旨とせよとの御諭に基つき、如何にも軍人の妻らしい細君と二人も木綿着物の生活に滿足して居た。

大尉の嗜好なば本職の軍隊生活以外に酒も其の一であつたが、いくら呑でも眞面目な態度を失なつたことは無かつた、こんな具合で大尉は算筆の才もあり日清日露の兩役の勳功もあると云ふので上官からいつも可愛がられて居た、部下に驕るやうな風もなく終始して來たのである、自分はこんな模範士官を失なつたことを殘念におもふが大尉は寧ろ死に場所を得たと泉下では微笑を洩して居るのであらふ。云々

第四十五彈

（論功行賞の御沙汰）

池部大尉戰死の日附をもつて左の通り叙勳行賞の御沙汰があつた。

陸軍歩兵大尉 從六位勳五等 池部末尾

叙功五級授金鵄勳章（年金三百圓）

叙勳四等授雙光旭日章（九月二十六日）

次に出版する新著文庫は諸君のおなじみの

寶藏院流槍名人 寶藏院覺禪坊 怪勇無双 鞍馬神之助

の豪勇無双のお話でありますから本編同樣御愛讀を願ます

青島肉彈戰 鬼佐久間（完）

不許複製

大正三年十二月一日印刷
大正三年十二月二日發行

鬼佐久間

著者　三木都山

大阪市南區北炭屋町四十九番邸
發行者　岡本增次郎

大阪市西區阿波座中道二丁目四番地
印刷者　荒木佐兵衛

大阪市南區四ツ橋東南詰南へ入
發賣所　岡本增進堂
電話南四一二二番

278
71

終